

# シンガポールエアショー2024参加報告

本年10月に開催される国際航空宇宙展2024東京（JA2024 TOKYO）への出展者誘致および海外代理店との打ち合わせを実施するため、2024年2月19日（月）～2月22日（木）までの間、シンガポールエアショーに参加した。本稿では、その概要を報告する。

## 1. エアショーの概要

### (1) 開催概要

シンガポールエアショーは、1981年に始まったアジアン・エアロスペースに前身を持つアジア最大級の航空宇宙および防衛の展示会である。2008年から政府系の展示会運営会社であるExperia Eventsによる隔年開催となった。今回で9回目を迎え、2月19日（月）～22日（木）のトレードデイおよび23（金）と24（土）のパブリックデイの合計6日間にわたり開催された。

主催者説明によれば、4日間のトレードデイで、50カ国から1,000を超える企業および60,000人の参加者があったとのこと。また、パブリックデイにおいても60,000の参加者を得たとのことで、ほぼ、コロナ禍前の様相となっている。

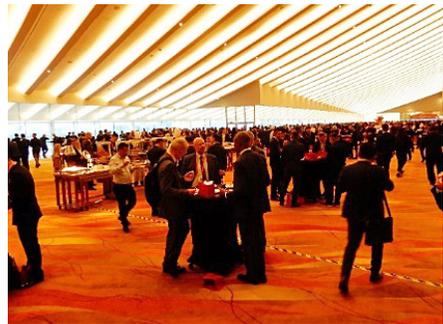
開会式（オープニングセレモニー）およびレセプションは、2月19日（月）にSands Expo and Convention Centre を会場として、多数の国々からの官・民の要人を招待者として迎え入れて行われた。開会式では、シンガポール副首相Heng Swee Keat氏が約20分にわたり、シンガポールが如何に航空宇宙産業に力を入れているかを力説、グリーンイノベーションや人材育成にも注力しており、年に1,800名の学生が航空宇宙産業に就職すると説明があった。

開会式会場となったBallroomは、7,672m<sup>2</sup>で、東南アジア最大の広さを誇り、最大8,000人を収容できる。オープニングセレモニーの後に

開催されたレセプションでは、会場の端が見通せない広さであった。また、招待客の半数は軍関係者であったことが印象深かった。



Heng Swee Keat氏



レセプションの様子

### (2) 展示会の特徴とアクセス

会場は例年通り、Changi空港に近接したChangi Exhibition Centreであった。空港に隣接しているとは言え、交通の便は悪く、主な交通手段は、会場最寄りの地下鉄（Expo駅）からの有料シャトルバスによるピストン輸送であった。また、最寄りのExpo駅にはSingapore Expoという展示場施設が隣接しており、その

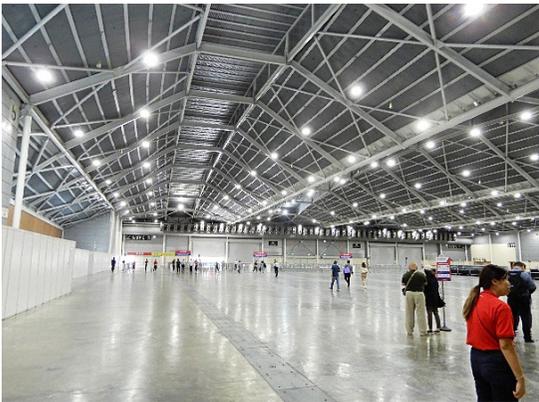
中の一つのホールを乗車待ち行列用に準備されていた。このため、エアショー会場入口での混雑は分散されることになり、エアショー入口での入場自体は、30分程度でスムーズに入場することができた。

主催者説明では、60,000人の来場者であるが、その大半をシャトルバスにより輸送したことには驚きを感じる。

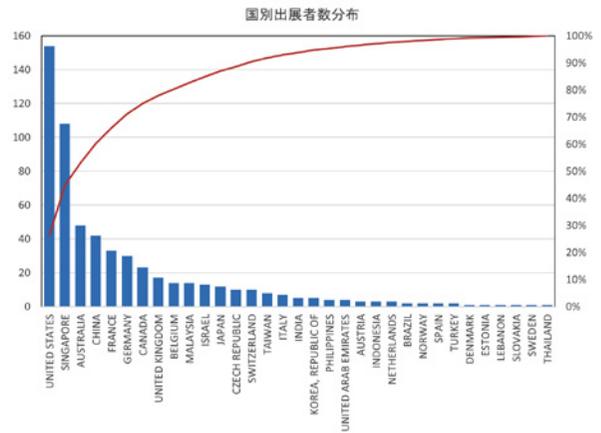
会場であるChangi Exhibition Centreは、広さ14,000m<sup>2</sup>のHall Aと広さ16,000m<sup>2</sup>のHall Bを広さ3,200m<sup>2</sup>のHall Cで繋がれている「工」型の

形状をしており、Hall Aには主要な企業の広いブースが、Hall-Bには小口の出展者の国別、地域別にまとまったブースが展開されていた。また、会場には、公共の商談スペースが随所に設置されており、小口ブースの出展者が手軽に商談やネットワーキングを行えるような配慮が見られた。

主催者が公表しているExhibiter Listによれば、出展者数は、600社弱、米国1位、2位シンガポール、4位中国、1位と2位で出展者数の約半数を占める状況であった。



シャトルバス乗車場の様子  
(最奥が乗車場)



国別出展者分布  
(Exhibiter ListからSJACで集計)



会場全景

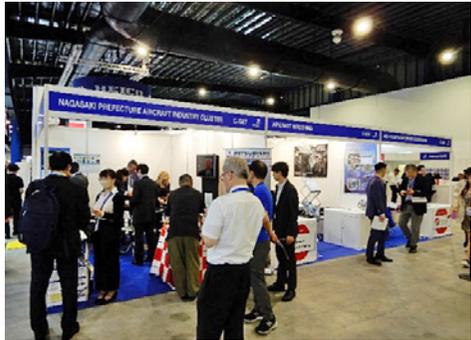
会場のメインエントランスは、Hall-Aにあり、メインエントランス正面に、シンガポールのSTエンジニアリング社が広いブースを展開していた。そのすぐ後ろにCOMACやAVIC社のブースが展開され、さらにそれらを取り囲むようにBoeingやAirbus等の広いブースが展開されるレイアウトであった。シンガポールからは、STエンジニアリング社以外にも多数出展していたが、まとめて一つのブースを形成していた。

Hall-Bは、小口の出展者を地域別にまとめたブース配置であるが、出展者数1位の米国のブースは、STエンジニアリング社に匹敵する広い面積を有していた。

日本からは、防衛装備庁ブース、地方公共団体と日本企業がまとめた日本ブースの2つのブースが出展されていた。防衛装備庁のブースは、若干、奥まった位置ではあるもののHall-A内の野外展示場への出入りに隣接した場所にあり、盛況であった。日本ブースは、Hall-Bの中央付近に設置されており、同じ日本からの出展であるにも関わらず、出展場所が離れており、連携を考えるにあたって課題があるという印象であった。



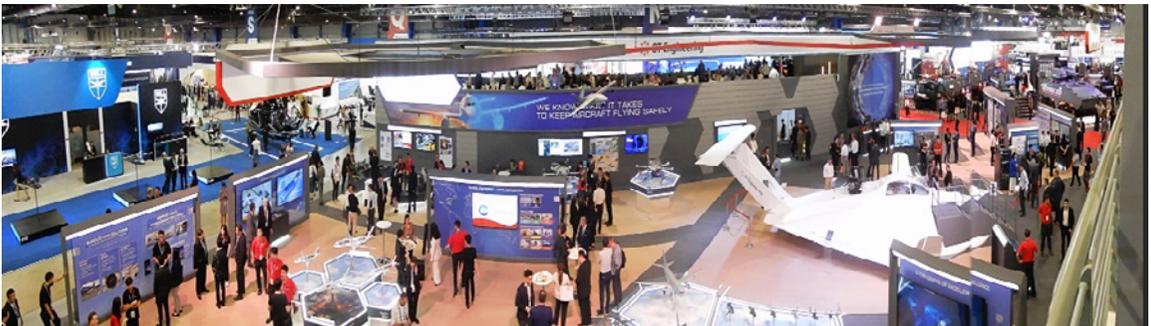
防衛装備庁のブース



日本ブース



COMAC社のブース  
(C919の模型が展示されている)



STエンジニアリング社のブース (左端から右端までの全域)

### (3) 室内展示

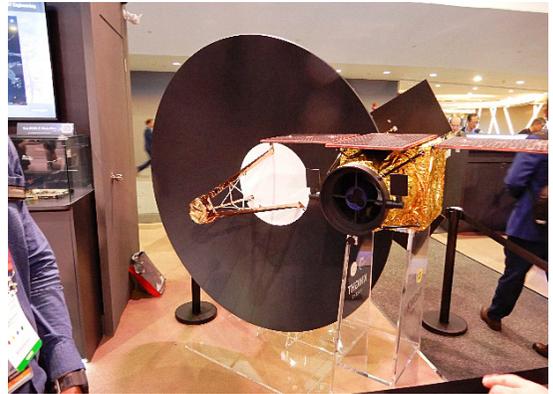
室内展示では、各種航空機の模型やエンジン、部品や素材および加工技術等の展示がなされていたが、今回、特に特徴的な傾向としては、ドローンや無人機の展示が多かったことが挙げられる。比較的容易に完成機を提案できることが要因と考えられる。今後、野外

展示で複数展示されていた無人機と共にこの傾向は続くものと思われる。

なお、宇宙に関する展示は、防衛装備庁ブースでのパネル展示以外には、STエンジニアリング社のブースにて衛星模型展示のみであった。



R&R Trent XWB



KINGHT Sat (手前) / TelEOS-2 Sat (奥)



ドローン／無人機の例

#### (4) 野外展示と飛行展示

野外展示場では、Airbusを始めとする商用機およびシンガポール空軍やアメリカ空軍の軍用機等、大型、小型を含め、約40機が展示されていた。また、飛行展示は、昼前後の時間帯で、商用機単独でのアクロバット飛行や各国空軍のアクロバット飛行が披露されていた。商用機ではAirbus-A350の単独飛行展示に対するCOMAC C-919の飛行展示があり、印象深かった。

Boeing社に関しては、単独での野外展示や飛行展示は、無かった。軍用機では、米空軍のF-35A、マレーシア空軍のSukhoi30等が展示されていた。



C919飛行展示



A350-1000飛行展示



Sukhoi30 MKM (RMAF)



F35A (USAF)



P21 (オーストラリア空軍) 飛行展示

## 2. 工業会活動

### (1) 他国工業会との交流

AIAレセプションに参加、AIAのPresidentであるEric Fanning氏と親交を深めるとともに、JA2024への協力への感謝の意を伝えた。Fanning氏もJAに参加することを楽しみにしているとのことだった。

また、シンガポール航空工業会（AAIS）のブースを訪問し、CHIEF EXECUTIVE Sia Kheng Yok氏にご挨拶するとともにJA2024の説明を行った。



Eric Fanning氏（左）と山岡常務（右）



Sia Kheng Yok氏（右）と山岡常務（左）

### (2) 防衛装備庁ブースへの訪問

ご担当の府川企画官にご挨拶した後、日本からの出展企業13社全社にご挨拶させて戴いた。その中で複数の企業の方からJA2024への出展に関心をもって戴いた。

### (3) 地方公共団体ブースへの訪問

日本の地方公共団体がまとまって出展しているブースを訪問し、ご挨拶させて戴いた。

### (4) 国外代理店との調整

JA2024への出展者募集を依頼している国外代理店との打ち合わせを実施した。

米国の代理店からは、米国企業のJAへの出展意欲が非常にアクティブである状況の説明を受けた。また、ドイツの代理店からは、JA2024と同時期に開催されるIAC@ミラノがあり、宇宙関連企業および団体は、そちらを優先する動きがあるの説明を受けた。次回開催の参考にしたい。

## 3. 所感

今回のシンガポールエアショーは、コロナ禍以前に戻りつつあるものの、パリやファンボローに比べると規模が小さいとの印象は否めない。会場レイアウトもシンガポールの国情が表れているようであった。航空宇宙産業の輸出入額が、日本の数倍、世界でも上位に位置するシンガポールであれば、エアショーを開催し、シンガポールの存在感をアピールする明確な理由が理解できる。

一方、参加企業は、エアショーを機会と捉えて積極的にネットワーキングする企業とあくまで展示を主体とする企業があるように感じた。エアショーの前に仮想現実を活用したネットワーキング等を進めることで、エアショーを偶然の機会ではなく、必然の機会としてとらえることができれば、より効果的に活用できるものと思われる。

シンガポールエアショーの開催時期が、2

月であることは、夏のパリ、ファンボローから半年後というタイミングであり、ネットワーキングのフォローには効果的な時期と考えられる。シンガポールが隔年開催であるこ

とを考慮すると、非開催年に日本でJAという構図は、JAの更なる価値向上につながる可能性もある。今後の検討事項としたい。

[(一社) 日本航空宇宙工業会 技術部長 中村 陽一郎]